

全国大会を思い出しながら

北星学園女子中学校

白川部 籌夫

指導者であれば誰もが夢に見る全国大会出場。

今年も北海道の中学校の代表として、また、指導者の代表として全国大会を経験することが出来ました。北星女子のチームはいつものように大きくも無く、個人的な能力もさほど高くない普通のバスケット好きの中学生が集まったチームでした。

ただ個性的な持ち味と夢を持っている中学生であったことは間違いありません。

「個性を上手にチームに反映させる。夢は常に大きく持ち続けさせる。」

これが今年のチーム作りの方向であると考えました。

指導するときに一つの考えを持って指導に当たることは大切だと常々思っています。

常に真面目に取り組む子供たち、協力を惜しまない保護者の方々そして学校と関係者に応援いただき、私も素晴らしい夢を見せていただきました。

これまでご協力いただいた多くの方々に心から感謝いたします。

新人戦札幌地区、南大会、南北決戦、北海道カップ、春季大会、中体連地区大会、中体連全道大会そして全国大会と長い道のりでした。

今年度、特に印象に残った試合は、中体連全道大会での苫小牧和光中戦、全国大会での男鹿東中戦、決勝トーナメントでの若水中戦でした。

中体連全道大会の準決勝は全国出場を決める戦いです。

全国大会に出場出来るか出来ないかには、大きな違いがあると思っているので、いつも厳しく、ハードな戦いになります。

苫小牧和光は昨年度全国出場の経験を持つチームで今年度も力のある良いチームでした。

ポイントリーダー的な選手をどのように封じ込めるか？

和光中の練習してきた通りの試合運びにさせないためにどうしたら良いかがカギでした。

北星は特に防御面の強化、準備をして挑みました。

最後まで挑戦者としてのチャレンジ精神を忘れず、自分たちの鍛えてきた脚を信じ、戦うことが出来ました。

厳しい内容でしたが、計画通りの試合運びをすることが出来たと思っています。

全国大会では、関東1位所沢山口中と男鹿東中とのリーグ戦になりました。

2チームが決勝トーナメントに出場できる仕組みになっています。

1回戦の所沢山口戦は、さすが関東1位で北星らしいも出せずに終わってしまいました。

2回戦目は男鹿東との戦いでした。この試合に負けると全てが終わってしまう。

追い詰められた中で試合が始まりました。

終始激しく当たってくる、1-2-2ゾーンプレスを崩せるかがカギでした。

その準備はして来たつもりでしたが不安は山ほどありました。

ガードが二人とも大会直前の捻挫、主将が試合中の打撲で治療院に通いながらなどマイナス条件がありましたが、私の心配はよそに選手たちは明るく良くやってくれました。

重要視してきた個性がこの試合でも光りを放ち、それぞれが持ち味を発揮し勝利に貢献してくれたと思っています。

前半を28-24の4点リードで終わりました。

後半は相手の攻撃リズムを乱すためにゾーンD e fを採用しました。

ゾーンD e fをいつ使うか苦慮しましたが、早めに一度試すことに決断しました。

終了間際、#4に立て続けに3Pを決められました、何とか6点差を持ちこたえてくれました。

接戦を制し勝利を得たことで選手・応援団も嬉しさに溢れていました。

夜の抽選会で若水中と対戦することが決まりました。

決勝トーナメントの顔ぶれはいつも強豪揃いで、どのチームを引いても厄介なチームばかりです。

その中でも若水中は特に力のある強豪チームです。

手を伸ばすと今大会一番の高さを誇るセンターを有し、優秀な能力を持つ選手がそろっていました。チームを率いる杉浦先生は、どんな時でも選手の能力を最大限に引き出しチームを作る、経験豊富な素晴らしい指導者です。

20年前に北星が初出場した新潟全中で戦ったのも杉浦先生率いる千種台中でした。

北星は今のチームで考えられる様々な方法を使って挑んでみましたが、力の差を見せつけられ2回戦に進むことは出来ず、ベスト16で終わってしまいました。

一つの目標であった、先輩たちの過去の成績を越える事が出来ず残念でした。

20年ぶりの試合後、杉浦先生と握手をしながら健闘を讃え合いました。

選手と共に本当に試合を楽しみました。

これが3年生と共に戦った最後の試合です。

「この一年・・・」

今年のチームをどんなチームにしたら良いか。

チームにどんな長所があり、どんな短所があるのか。

どこを伸ばせば強くなるのか。

一人一人の選手の個性を伸ばしチームの為に反映させる。

北星のカラーは何か（バスケットスタイル）

こんな事を考えてチームづくりをしてきました。

常に夢を持ち続ける事を大切に、まだまだ、もっといける、チャンスはある、夢は大きく、プラス志向の言葉が多かったように思います。

「指導者を目指す方々へ・・・」

若い指導者は、全国レベルのバスケットを肌で感じ取る機会を多く持って欲しい。

そで得た知恵や意識を常に保ち、持ち続け指導する事が大切と思います。

多くの情報過多の中、信念を持ち貫き通せるものを一つ持つこと。

妥協を許さない指導場面もあり、変幻自在の指導場面もある。

私はそう考えています。

そして、「指導者として自分自身のバスケットに対するレベルが下がっている事に気がつかない自分が怖いと考えています。」

20年前の初出場した新潟大会から数え、今年10回目の全国大会をプレゼントしていただきました。

指導者として選手・保護者・卒業生・学校・関係者に恵まれ、思い通りに日々送らせていただき、選手と共に生活出来たことに心から感謝いたします。